

PLANET LIFE

http://caramelplanet.xxxxxxxx.jp/

PLANET ZERO
INFORMATION PRESS
110821 in SCCKANSAI7

mailADD : ai@planetzero.halfmoon.jp

GKでは二度目のインテです。今年の冬インテでジャンル初参加したのがもう遠い過去のこのよう。懐かしい。何もかもが懐かしい。今年の夏はなぜかWバロとイロモノに終始してましたw 新刊はセラサクではなくて、よろめき本の第二弾です。まさかの二冊目。前回も「大人の真意のお遊び」と思ってたのですがありがたいことに大層な反響をいただきましての二冊目です。お楽しみください。夏コミの新刊は某ドラマ&映画「SP」のWバロです。こっちはサイトで前章部分をシリーズで書いてますのでよろしければ。今日は一緒ににんにんさん謹製のフックマーカーつき。とーん！「SP」は来週映画の革命編のDVD発売なのでぜひ！観てください！ものつすこいセラサクだから！てか、尾形さんが唄さんだから！はあはあ。てなわけで、イロモノとWバロオンリーの夏というのもどうかと思っただけでペーパーは日常ネタです。夏コミ配布とお対ネタ。その内どっちもサイトにアップしますよ。だがかし、中の人などいない。うん、私もそう思う。

中の人 antoter side

「俺の、カラダだけが目的なんじゃないかって……最近なんかそう思えてしょうがないんす」俺は世良の話を聞きながら苦笑する。「いつももっといいカラダしてたらって俺にクチってる誰だよ？」「あー！ それとこれとは別なんです！ 俺、若いし。スタミナだけは自信あんすよ。それでスタメンに起用してもらってる部分あるし」真顔で言ってから世良はちょっと照れたように頭をがいた。「あとまあ、相手を満足させるだけのモンは持っている……って思うんすよ。そりゃ最初の時はいろいろ失敗あったけど無事にやして一、その日は朝まで一緒に寝てたし。これってすくなくないっすか？ 俺の腕の中で熟睡してたんすよ？ あー、思い出しただけで勃つ。マジで勃つって」「世良の腕の中でするのは、大げさだろ？」冷静にツッコむと「正確には隣っすけど。同じベッドには寝ないからいいじゃないっすか、そんな細かいとこ！」と世良はむくれる。俺の仕事はあえて言うなら広報系だが、裏では選手のメンタルケアも担当している。もちろんサラリーマン選手たちの恋愛相談がインクルードされているわけでもない。だが、ウチのチームの大事な選手の心の憂いを取り払えるのは、ETUサポーターのひとりでもある俺には喜びでさえある。それに、実際こうして若手が心を割って自分の秘密を打ち明けてくれるなんて光栄な話じゃないか。それだけ俺を信頼してくれているということだ。俺はきゅうりをつまみに、日本酒をくいつとあお

る。日本酒はいい。心にもしみいる。なじみの居酒屋はいつもETUの選手と関係者たちが心地よく過ごせるようにと一般人の目に触れない個室を用意してくれる。ありがたいことだ。「で、最初から身体の相性もあってお互い忙しい身でありながらそこそこ逢えてるんさ？ 今、楽しくてたまらないんじゃないの？」世良は「まあ、そうっすね」とこちらはでててれの顔で応えた。それからはずっとしたように顔を引き締める。遅いよ。もう幸せいっぱい顔は見てしまっている。やれやれ、のろけ話を聞くのは楽しじゃないんだがな。俺は笑って「だがな、世良。こういう問題は相手の気持ち尊重してやるのが何よりも大事だぞ？ すつと、大事にしていきたいんさ？」と諭す。若さとプロサッカー選手の体力を持つ、情の深い世良に愛されているのなら相手は大変だろつ。「っす」世良は真顔でうなずいた。「ああ、でも。相手はお前の身体目当てなんだっけ？」途端にしゅんとなる。世良は表情が豊かだ。最近くつと急増していると聞く世良サボたちもプレイだけでなくこういう部分にも魅力を感じているのかもしれない。「……なんが。エッチしてなかった時の方がもっとこう……心の交流みたいなの？ モンがあつた気

がするんす。最近二人で逢えてもすぐにはシャワー浴びてぞんで……って感じて。もちろんすげえ大事にしてるんで。気持ちよくさせてはいます。いるけど、その……」俺はため息をつく。実を言えばつい数日前に世良の恋人から相談を受けたばかりだ。「……大丈夫だ。世良、お前はいい男だ。うめられるなよ？ けど、俺は長いことETUの選手を見てきてるからな。その俺が言う。お前はいい男だよ。情が深くて例えへこたれても自力で立ち上がれる。自分の弱さを自覚できてなおも前に進める男だ」世良の顔が真っ赤になる。俺は微笑した。一瞬口説きたくなる。よくないワセだが相手がいるとわかって人間に手を出すほど俺は愚かではない。どの道抱いたところで決して最終的に幸福にしてやることなどできない身体だ。第一、世良の心がこれと決めた相手から動くわけもないがといえずに心を押し殺す。世良の恋人は俺もよく知っている。不器用だがいいヤツだ。幸せになるのに相応しいだけの人間だと思う。性格的に難しいところがあるからいろいろ心配していたが、いい相手にめぐり合えたのだと、むしろ世良に感謝しているほどだ。それを、ほかならぬ俺が、世良と世良の恋人を不幸にするなどありえない。何より優先されるのは選手のメンタル部分の充実であって、俺の肉欲ではない。それは、俺のアイデンティティでもある。わずがばかりの未練を切り捨て、俺は「大丈夫だ」と訓け合つた。「お前がそんなにまでして心を開いている相手がお前を想わないなんてことあるもんか」そう言うと世良は薄暗い居酒屋の中であつてもはつきりと顔を赤らめる。一瞬悪心が疼くががらうじて堪えた。大丈夫。俺の腕を必要としている子羊は他にいくらでもいる。俺がねんごろにベッドでケアしてやるのはそういう連中であつて、こいつではない。「俺、そんなに褒められたこと……ないっす」「……唄はそういう甘いことを言うヤツじゃないだろ？ 安心しろ。あの男がお前にそれを許して

るってことはな、世良。お前にめろめろってことだよ」「……な、んで……っ？」「なんて、俺がお前の恋人が誰か知ってるがだつて？」俺は笑って盃を傾ける。「俺が知らないことなどないのさ。俺は、ETUの象徴だぞ？」世良は驚愕の表情から宥堵の表情に変わる。「……きゅうり、奢らせてください。おやつさんが、今朝ご自宅で収穫したヤツだそうです」「ああ。遠慮なくもらうよ」俺が額くと世良は嬉しそうに笑った。それから気がついたように言う。「どうせ個室で二人きりなんすよ？ その被りもの、とっていいんじゃないっすか？」世良の申し出に俺は首を横に振る。「ばか野郎、中の人などいない。がお約束だろつ？」マスコット界の清し屋などという物騒な通り名はあるが、俺の本当の仕事は選手のケアだ。そのことを今日も確信した。世良は「そうっすね、すんません」と笑うと、有言実行、俺のために大好物のきゅうりをオーダーしてくれた。奇しくも数日前の恋人と同じ気遣いをする世良に俺は軽く頷いてみせる。俺は豪快に生ききゅうりを齧りながら二人の恋を心から応援することを誓つた。

◆◇PLANET ZERO EVENT INFORMATION◆◇
セラサク小説、大体大人向け。たまにイロモノもあります。
10/2 浅草トライアンプ3 10/23 コミックシティスパーク
12/30 冬コミ (申込み済)